



# WebCT100

Hiroshima University

## 平成 17 年度

# WebCT100 プロジェクト報告書

平成 18 年 8 月 広島大学教育室 遠隔教育委員会



# 目次

はじめに .....	1
WebCT100 プロジェクト実施状況.....	4
学生アンケート.....	10
授業アンケート.....	13
教員アンケート.....	15
WebCT100 プロジェクト報告会.....	20

（冊子版の21ページ目以降には報告会時の発表資料が掲載されていますが、この部分は教員の著作に関する部分につき、Web版での公開は控えております。）



# 1

## はじめに

教育室遠隔教育委員会では、広島大学の教育の情報化の一環として通常授業にCMS(コースマネジメントシステム)を試行的に取り入れることを計画し、平成17年度に全学的に参加者を募って「WebCT100プロジェクト」を行った。「はじめに」では、その趣旨、実施状況、成果について簡単にまとめ、それに基づいて、今後の広島大学におけるe-Learningの方向について提言を行いたい。

### 1.1 WebCT100プロジェクトの趣旨

広島大学では、平成18年度から教育プログラムを導入し、到達目標を明示した教育を進めている。その目標を着実に実現していくためには、現代の情報化技術を教育の中に取りこみ、高い水準の教育を実現、維持していかなければならない。教育の質を向上させ、学生・教員双方の満足度を高めるためには、授業の質的向上の努力が、地道ではあるが、王道である。その一つとして、日常の授業の中にCMS(コース・マネジメント・システム)を取り入れることによって、教室での対面授業ばかりでなく、

- 授業計画の提示、
- 予習・復習教材、
- これらを学生がどのようにアクセス、消化しているかの学習履歴の把握、
- 学生とのコミュニケーション

などに利用して、教育効果をより高めていくことができる。さらに、講義ノート、参考資料、掲示板でのコミュニケーションの結果などを統一した形で提示することができ、広島大学の教育コンテンツの整備につながる。

すでに2001年度から、情報メディア教育研究センターにおいてCMSの一つであるWebCTが運用されており、全国的にも高い水準の活動が進められている。WebCTは世界70カ国2000以上の教育機関での利用実績があり、国内でも60近くの大学で採用されている。

一方、すでに新入生の大半が「オンライン情報倫理講座」「オンライン情報セキュリティ講座」の受講<sup>1</sup>を通してWebCTを利用しており、学生はWebCTの使い方慣れているという状況にある。学生の側から見たとき

<sup>1</sup> 学部により異なっているが、新入生のうち6割以上に対して、入学初年度の基礎情報教育の中でこれらの受講が義務づけられている。

の利点は、履修している授業科目のすべての資料が統一した形で見られるところにある。

以上のような状況を踏まえ、「WebCT100プロジェクト」の計画を立て、平成17年度に450万円の予算を得て実施した。

### 1.2 「WebCT100プロジェクト」の内容

1. 年間、100科目のCMSコースの新規構築を行う。  
この数は全科目数15084(シラバスによる)に対して必ずしも大きな数ではないが、各学部ほぼ10~20の科目で実現されると、大部分の教員は身近に経験者を見つけることができ、導入法、効果について知ることができる。分野は問わないが、専門:教養:大学院=40:50:10程度とする。
2. 実施する教員一人当たり、30時間のTA経費を所属部局に配分。
3. 教務補佐員1名を雇用し、以下を行う。
  - 上記TAの教育・管理
  - CMSサーバー管理
  - 教員のコンサルティング
4. 年度末に勉強会を兼ねてプロジェクト報告会を実施する。

### 1.3 実施状況

詳細については、以下の資料に示すことにし、ここでは実施状況を簡単に紹介する。

#### プロジェクト参加教員および授業科目

WebCT100プロジェクトには、前期39名、後期43名の教員が参加した。うち前後期通して参加したのは16名であった。また、今回初めてWebCTを利用した教員は48名だった。コース(授業科目)数は、前期52科目、後期51科目の計103科目で、そのうちで約60科目が活発に利用されていた。

#### サポート体制

4月および5月に東広島地区で各1回、霞地区で1回、また9月に東広島地区で2回の利用説明会を開催し、加えて「進んだ使い方」の講習会を9月に行った。

また、平成 18 年 1 月から、西図書館に「コンテンツ作成支援室」を設置し、月、水、金の週 3 回利用相談にあっている。

利用のための資料としては、情報メディア教育研究センターの隅谷助教が「はじめての WebCT」というチュートリアルを作成し、Web 上に PDF ファイルで公開<sup>2</sup>している。

さらに、最近、「コンテンツ作成支援室」でこの Flash 版を作成し Web 上で公開<sup>3</sup>している。

## WebCT100 プロジェクト報告会

報告会を、平成 18 年 3 月 6 日に学生会館レセプションホールで開催し、約 60 名の参加があった。熊本大学の情報基盤センターの中野裕司教授による熊本大学での取組の紹介、本学高等教育研究開発センターの北垣郁雄教授による e-Learning の教育評価に関する講演のあと、利用者から利用経験に関する報告をいただいた。詳細は後掲の資料を見ていただきたい。

## 学生、教員へのアンケート

前期末、後期末に参加学生、教員を対象にアンケートを行った。結果の詳細は資料に譲るとして、学生アンケートでは「WebCT があることで学習がはかどったか」という質問に 50%以上の肯定的な回答を得た。また、教員対象のアンケートでは、「WebCT のような授業支援システムは授業を行う上で役に立つと思うか」という質問に対し 70%以上の肯定的な回答を得ている。一方で、教員のボランティア的な活動に頼るのではなく、大学全体としての方針の下で実施すべきであるという意見もあった。

## 1.4 平成 18 年度の取り組み

WebCT100 プロジェクトは平成 17 年度限りの企画であったが、「コンテンツ作成支援室」は平成 18 年度も引き続いて活動する。17 年度に参加した教員への支援を続け、内容の更新、改良を進める。平成 18 年度前期には、昨年度プロジェクトに参加したコースに加え、新しいコースも加わり、90 以上のコースが開設されている。

WebCT100 プロジェクトに関連した取組として、社会科学部研究科の安武公一講師による WebCT と Wiki を組み合わせた協調学習の試みが報告されている。学生をグループに分け、各グループでの学習、討論結果を Wiki 上に作成し、グループ間の討論を経た上で WebCT 上のコンテンツとして完成させていくという方法である。こ

2 <http://www.riise.hiroshima-u.ac.jp/webct/doc/webct-sbs.pdf>

3 <http://www.riise.hiroshima-u.ac.jp/webct/sbs/>

の方法は、すでに数名の教員によって試行されている。これを拡張した形で、文部科学省の現代 GP に「知識創造型教育のための協調学習空間の構築」という題で申請したが、残念ながら採択には至っていない。

INU の国際共同授業の試みとして、オーストラリアの教員参加による、教養教育科目「INU 特別協力講義 A」、「INU 特別協力講義 B」が WebCT を利用してすでに開設されている。

通常の授業以外の、各種 e-Learning プロジェクトでの WebCT の利用も行われている。

- 情報セキュリティ教育（情報政策室情報セキュリティ機構で実施中）
- アクセシビリティ教育（ボランティア活動室で計画中）
- 情報メディア教育研究センターや図書館のガイドライン資料（計画中）

さらに、教育室では「WebCT もっと使おう！プロジェクト<sup>4</sup>」を発足させ、事務系職員を含めた教職員への普及を目指している。

## 1.5 WebCT100 プロジェクトと今後の方向

この試行プロジェクトで得られた成果と今後の方向について述べる。

### (1) CMS の可能性

後掲の報告会の資料にも見られるように、WebCT を例とする CMS の持つ機能としては、

- 学生の学習支援（授業に関するシラバスを含む詳細な情報の提供、教材、参考資料の提供、小テストを用いた学生自身による到達度の把握、掲示板を用いた学生間のコミュニケーション）
- 教員の授業支援（小テストの自動採点、出欠管理、レポート管理、成績管理、掲示板を用いた教員と学生、また学生間のコミュニケーション）
- 授業の評価改善のための情報の収集管理

等がある。教員はこれらの機能のうちから今の授業に取り入れられる部分から利用することが出来る。掲示板や課題などのツールを使うことで、残される情報そのものが FAQ であったり、優秀な課題をみんなで共有したりすることで、蓄積される学習活動をコンテンツとして再利用することが可能になる。

これらは、CMS が教育プログラムの目標を達成する

4 <http://home.hiroshima-u.ac.jp/kyoiku/webct/motto-tukaou/>

ための有効なツールとなることを示している。

また、国内外の高等教育機関との共同授業を行う際のプラットフォームとして用いることが出来、さらに、学生アンケート、教員・職員のFDにも用いることが出来る。

## (2) 今後の方向

### i) 次期学生情報システムへのCMSの導入

上に挙げたような特長を持つCMSを、今後の広島大学のe-Learningの基本として取り入れていくことが有効であると考えられ、「もみじ」に続く次期学生情報システムに取り入れていくことが望ましい。熊本大学や大阪大学などでは、学生情報システムとWebCTとの連携が図られている。

### ii) 全学的支援体制の確立

メディア教育開発センターの調査<sup>5</sup>によれば、広島大学に限らず、全国の大学でe-Learningを進めて行く上で課題となっているのが、

- 教員のe-Learning等に関するスキルが不十分(61.9%)
- e-Learning講義システムの開発に関するノウハウが不十分(50.0%)
- e-Learningの教育効果に対し教職員の理解が不十分(49.7%)
- 著作権契約等権利処理のノウハウが不十分(44.5%)

などの諸点である(数字は回答全機関に対する割合)。WebCT100プロジェクトでの教員アンケートの回答でも、同様の意見が出されていた。

これらの課題を解決する上で最も重要なのは、全学的なサポート体制を確立することである。平成18年度末までは、情報メディア教育研究センターに「コンテンツ作成支援室」を開設しているが、これを全学的な「e-Learning推進室」(仮称)として充実させ、教員のコンサルティングに加え、TAの養成を組織だてで行っていく必要がある。

CMSを利用してより教育効果を高めるためには、従来の支援形態に加え、

- 授業形態を変える動機付けとなるプロジェクトの企画

- 高等教育専門家による授業デザイン相談
- 高等教育専門家による教授法トレーニングの実施
- 著作権処理に関するコンサルティング

等の、インストラクショナル・デザインの観点からも支援できる体制を作る必要がある。

内外の先進的な大学の事例を見るとCMSの導入には、次の3つの段階があると考えられる。

### i) 従来の授業を補完

授業に関する情報の提供、例えば、シラバス情報、授業資料をWebで提供

### ii) 従来の授業形態が変化

授業に関するコミュニケーションの拡張、例えば、掲示板で教師学生間、TA学生間、学生同士の議論の展開

### iii) 全く新しい授業形態の樹立

教授方法の多様化、例えば、学生個々人の知識、進度に合わせた学習内容の提供、学生による学習素材の自発的な作成

今回のWebCT100プロジェクトでは、第1段階のCMS利用を広めることができた。また、第2段階、第3段階への試みもすでにいくつか報告されている。全学的な支援体制の下でのCMSの導入は、本来の目的である授業の質的向上、教育コンテンツの充実の達成に大きな力となるであろう。

5 「e-Learning等のITを活用した教育に関する調査報告書(2005年度版)」メディア教育開発センター(NIME)。これに拠れば国立52大学のうち何らかのe-Learningを導入しているのは69.3%、また、そのうちCMSを導入しているのは57%となっている(全体の中では各大学独自システムが多い)。

## WebCT100 プロジェクト実施状況

### 2.1 試行参加者

2005年3月1日付けで教育・学生担当副学長、学士課程教育センター教養教育推進部長、遠隔教育推進部長の連名で各部局宛に試行協力の依頼を出し、前期52科目、後期51科目の計103科目がプロジェクトに参加した。このうち、前後期同じ名前で開講されるものと通年の科目が6科目あったため、WebCTのコース数としては97コースが試行に参加している（次ページ表2-2）。

実施科目を担当する教員は、前期39名、後期43名で、前後期ともに担当する教員が16名いたため、前後

期で66名だった。このうち、試行以前にWebCTの利用経験がある教員は18名で、残り48名はこの試行で初めてWebCTに触れる事となった。

上記授業を履修している学生は、のべ人数で4,673名、実人数で3,569名だった。所属学部、学年別の構成を表2-1にあげる。

図2-1は各学年中の試行参加学生の割合を示している。教養教育科目が半分以上と多かったため1年生の比率が非常に高くなっている。図2-2は各学部中の、試行参加学生の割合を示している。

表 2-1：参加学生の構成

	1年生	2年生	3年生	4年生	その他	計
総合科学部	136	112	37	17	9	311
経済学部	94	158	140	68	35	495
歯学部	25	55	57	3	6	146
生物生産学部	113	64	57	2	1	237
理学部	110	130	56	42	13	351
工学部	299	199	172	41	9	720
教育学部	337	84	59	22	44	546
医学部	81	73	96	8	2	260
法学部	81	15	47	30	14	187
文学部	65	6	4	5	1	81
その他					235	235
計	1341	896	725	238	369	3569

図 2-1

学生の試行参加率（学年別）

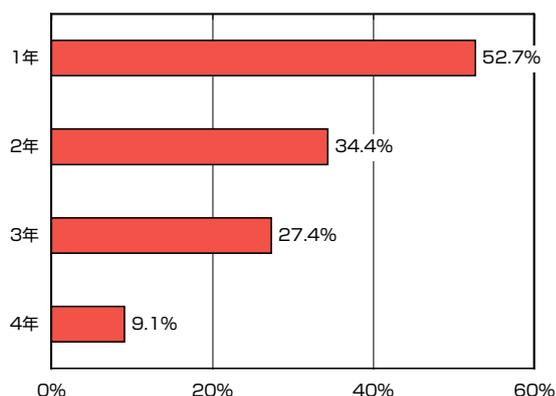


図 2-2

学生の試行参加率（学部別）

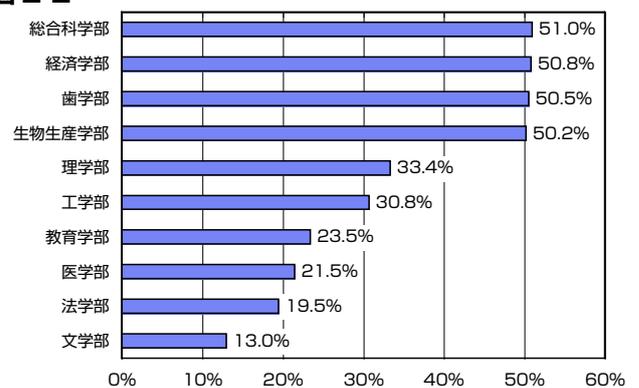


表 2-2 : 試行参加科目

## 前期

#	講義名	開講部局	担当教員
1	政治と制度	教養的教育	安野 正明
2	政治の世界	教養的教育	安野 正明
3	種生物学	教養的教育	井鷲 裕司
4	一般物理学	教養的教育	永井 克彦
5	国際関係論	教養的教育	永山 博之
6	世界の言語	教養的教育	酒井 弘
7	応用化学概論	教養的教育	早川 慎二郎
8	化学実験法・同実験	教養的教育	竹田 一彦
9	情報活用演習 (地球惑星システム学科)	教養的教育	田島 文子
10	日本国憲法 A	教養的教育	畑 浩人
11	物質とエネルギー 2005	教養的教育	畠中 憲之
12	生活から見た日本の近代	教養的教育	布川 弘
13	日本史 B	教養的教育	布川 弘
14	現代社会と経済 A	教養的教育	李 東碩
15	グローバル社会と経済	教養的教育	李 東碩
16	微生物学入門	教養的教育	沖中 泰
17	保健情報学演習	医学部	梯 正之
18	有機薬化学	医学部	武田 敬
19	心理統計法 I	教育学部	宮谷 真人
20	政治学研究	教育学部	畑 浩人
21	現代政治論	教育学部	畑 浩人
22	データベース活用論	教育学部	巖淵 守
23	マクロ経済学 1	経済学部	越智 泰樹
24	国際金融論 2	経済学部	石田 三樹
25	教養ゼミ	経済学部	石田 三樹
26	離散最適化	工学部	加藤 浩介
27	計算機プログラミング	工学部	西田 恵哉
28	環境デザイン論	工学部	千代 章一郎
29	流れの力学	工学部	土井 康明
30	流れの力学	工学部	日比野 忠史
31	プログラミング序説	工学部	片桐 秀樹
32	口腔生理学	歯学部	柴 芳樹
33	口腔生理学演習	歯学部	柴 芳樹
34	飼料学	生物生産学部	小櫃 剛人
35	情報活用演習 (総合科学部)	総合科学部	宮尾 淳一 坂田 省吾
36	健康福祉学	総合科学部	山崎 昌廣
37	数学演習 I	総合科学部	中原 早生
38	物質科学演習 I 2005	総合科学部	畠中 憲之
39	安全保障論	法学部	永山 博之
40	Current International Politics	法学部	吉田 修
41	税法	法学部	細川 健
42	数学通論 I	理学部	松本 堯生
43	情報化と職業倫理	理学部	石井 光雄
44	化学演習	理学部	相田 美砂子
45	口腔機能制御学特別演習	医歯薬学総合研究科	柴 芳樹
46	歯医学特別研究 (口腔機能学)	医歯薬学総合研究科	柴 芳樹
47	C A E 特論	工学研究科	北村 充
48	社会基盤整備工学	国際協力研究科	藤原 章正
49	交通工学	国際協力研究科	藤原 章正
50	国際公共政策論 2	社会科学研究科	安武 公一
51	基礎物理学概論	先端物質科学研究科	遠藤 一太
52	調査研究方法特論	保健学研究科	梯 正之

## 後期

#	講義名	開講部局	担当教員
1	ミクロ経済学入門	教養的教育	安武 公一
2	政治と制度	教養的教育	安野 正明
3	政治の世界 B	教養的教育	安野 正明
4	地球科学 B	教養的教育	於保 幸正
5	文化人類学 B	教養的教育	佐野 真理子
6	健康科学	教養的教育	山崎 昌廣
7	気候と生物	教養的教育	小澤 久
8	有機化学	教養的教育	深宮 斎彦
9	生活から見た日本の近代	教養的教育	布川 弘
10	日本史 B	教養的教育	布川 弘
11	スポーツ実習 C	教養的教育	磨井 祥夫
12	グローバル社会と経済	教養的教育	李 東碩
13	生物行動学	教養的教育	林 光緒
14	心電図入門	医学部	吉栖 正生
15	有機薬化学	医学部	武田 敬
16	心理統計法 II	教育学部	宮谷 真人
17	色彩論	教育学部	木下 瑞穂
18	マルチメディアの活用	教育学部	巖淵 守
19	マクロ経済学 2	経済学部	越智 泰樹
20	生物資源利用学	工学部	柿園 俊英
21	伝熱学 II	工学部	松村 幸彦
22	データベース	工学部	平嶋 宗
23	情報工学とその演習	工学部	濱田 邦裕
24	生産システム工学	工学部	濱田 邦裕
25	歯内・歯周療法学	歯学部	栗原 英見
26	コミュニケーション学	歯学部	小川 哲治
27	海洋環境学	生物生産学部	橋本 俊也
28	免疫生物学	生物生産学部	古澤 修一
29	保全生物学	総合科学部	井鷲 裕司
30	社会行動論	総合科学部	浦 光博
31	メディア活用演習	総合科学部	宮尾 淳一
32	文化創造論演習	総合科学部	桑島 秀樹
33	エレクトロニクス入門	総合科学部	小島 建一
34	論理と計算	総合科学部	中原 早生
35	線形代数学 II	総合科学部	中原 早生
36	物質科学演習 II 2005	総合科学部	畠中 憲之
37	都市社会史	総合科学部	布川 弘
38	比較倫理学演習	総合科学部	堀江 剛
39	体力科学論	総合科学部	和田 正信
40	物理化学 III	理学部	相田 美砂子
41	口腔機能制御学特別演習	医歯薬学総合研究科	柴 芳樹
42	歯医学特別研究 (口腔機能学)	医歯薬学総合研究科	柴 芳樹
43	医薬分子機能科学特論	医歯薬学総合研究科	小池 透
44	創薬合成化学特論	医歯薬学総合研究科	武田 敬
45	教育方法学特講 II	教育学研究科	深澤 広明
46	環境設計論	国際協力研究科	横堀 肇
47	経済開発論 II	国際協力研究科	金子 慎治
48	経済発展分析	社会科学研究科	越智 泰樹
49	家畜米養生理学	生物圏科学研究科	小櫃 剛人
50	レトリック理論	法務研究科	平野 敏彦
51	証券取引法	法務研究科	片木 晴彦

## 2.2 WebCT コース稼働状況

試行に参加するのに WebCT 未経験者という条件を特につけなかったため、試行参加 97 科目には、前年度までに作成されていた 11 科目も含まれている。

試行参加コース 97 科目のうち、実際に学生が登録されていたのは 73 科目だった。学生が登録されていない 24 科目のうち 11 科目は、教員からのアクセスもまったくなかった。

73 科目で、各科目の履修者の平均は約 60 名だった。履修者数を 25 刻みとして科目数を勘定したのが図 2-3 となる。73 科目中履修生が 100 名を越えるものは 12 件あった。もっとも履修生が多かった科目では、281 名となった。

各科目で、学期のどの時期に学生からのアクセスがどの程度あるのかを調べたのが図 2-4 である。WebCT サーバに残るアクセスログから、学生エリアへの認証付きのアクセス件数を科目ごとに抽出・カウントした。得られたアクセス件数を履修者数で割って学生一人あたり

のアクセス件数とし、1～10 件、10～100 件、100 件以上のそれぞれに何科目が相当するかを調べ週ごとに表示してある。次ページの図 2-5 では、73 コースへの学生アクセスを週ごとにカウントし、図 2-4 と同様の濃度で表示した。学期の前半や後半に偏って利用されている科目は思ったよりも多くなく、学期はじめから最後まで一定のアクセスを持っているものが多い。

図 2-3

履修学生数の割合

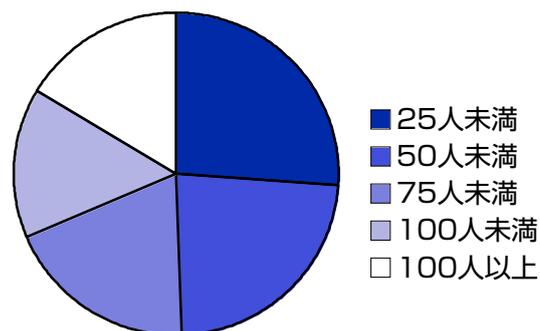


図 2-4

学生一人当たりの週間アクセス数が1以上のコース数

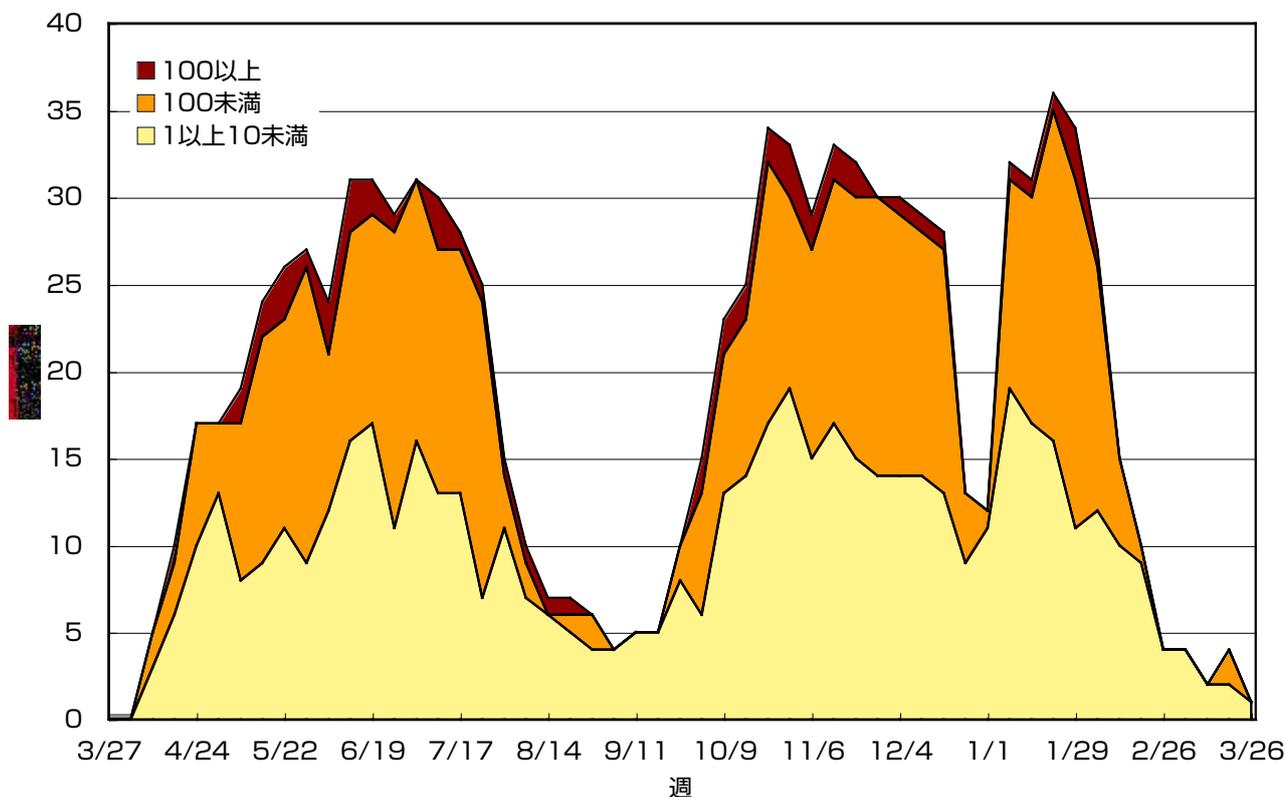
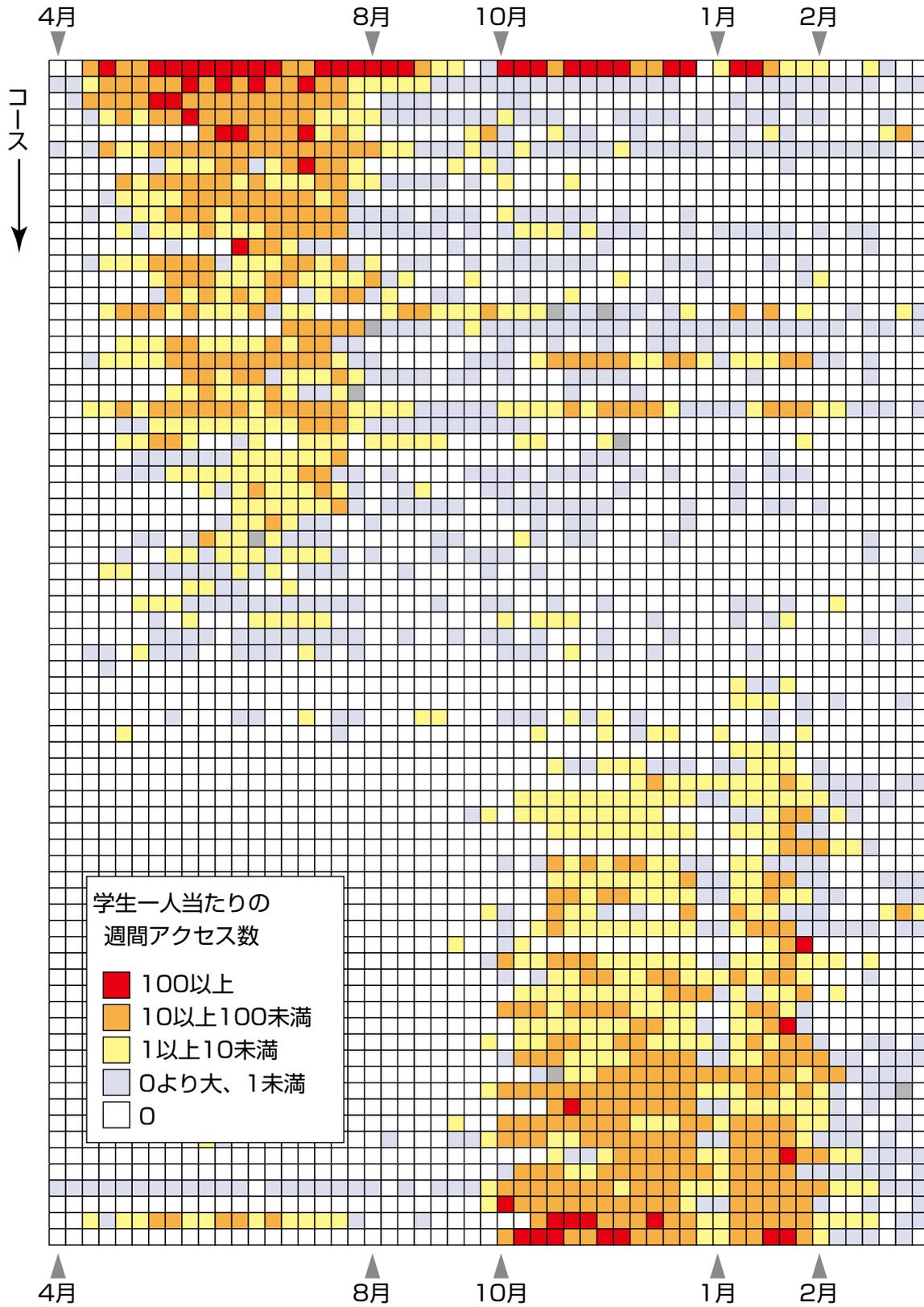


図 2-5 各コースへの、学生アクセス数（学生一人あたり、週ごと）



## 2.3 WebCT サーバの稼働状況

WebCT サーバのアクセスログをもとに、サーバの稼働状況を調べた。ここでの数字には、WebCT100 以外のコースもふくまれている。

まず、WebCT サーバへの時間帯ごとアクセス件数を調べると図2-6, 7のようになった。アクセス元を学外、学内、センター端末の三つに分類してある。

前期は情報科目で頻繁に WebCT を使用するため、アクセス件数が大きくなり、学内特にメディアセンター端末室からのアクセスが多くなる。学外端末（おそらく自宅設置 PC）からのアクセスは 22-23 時ごろ最大となり、学生が自宅でも学習している様子が読み取れる。

サーバのネットワーク負荷、CPU 負荷は継続的にデータを保存して監視をしているが、今回の試行程度の利用増では問題となるような負荷増はまったくなかった。

一方、ハードディスク残り容量が前期の間に心もとなくなってきたため、9月にハードディスクを増強した。それ以降のディスク使用量、WebCT の各領域でのディスク使用量を1週間毎に調査し図示したのが図2-8である。後期の間におよそ2.5GBのディスクを消費している。

次ページの図2-9は、WebCT サーバへのアクセス件数を月ごとに示したもの。メディアセンターで WebCT を導入した 2001 年4月からのデータである。ここでは、月に200件以上のアクセスがあったものを「アクティブなコース」と便宜的に定義している。

図 2-6

時間帯毎のアクセス数 (2005年度前期)

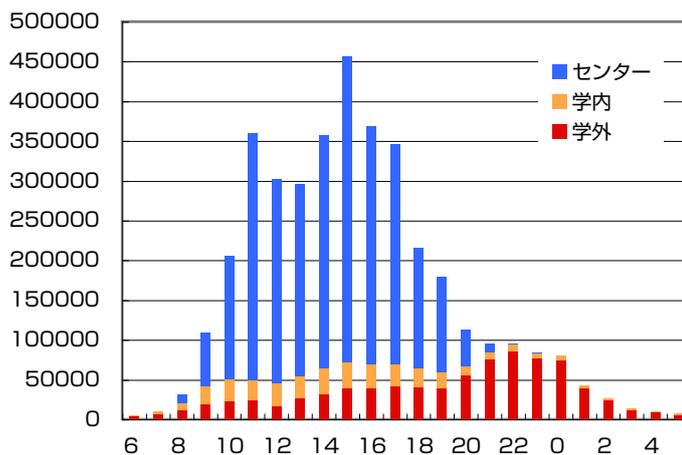


図 2-7

時間帯毎のアクセス数 (2005年度後期)

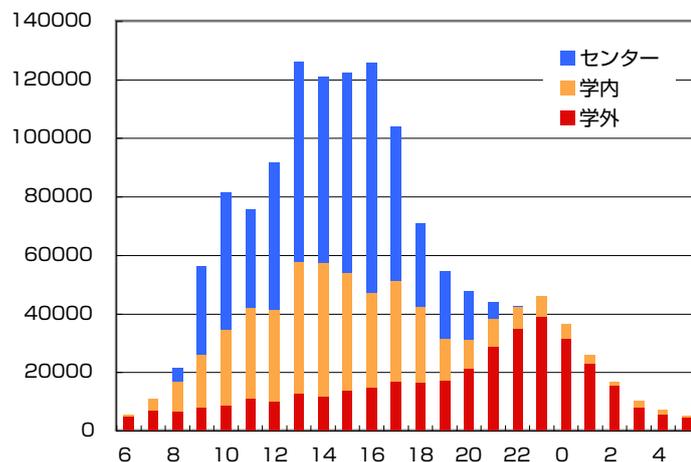


図 2-8

各コースのディスク使用量推移 (2005年度後期)

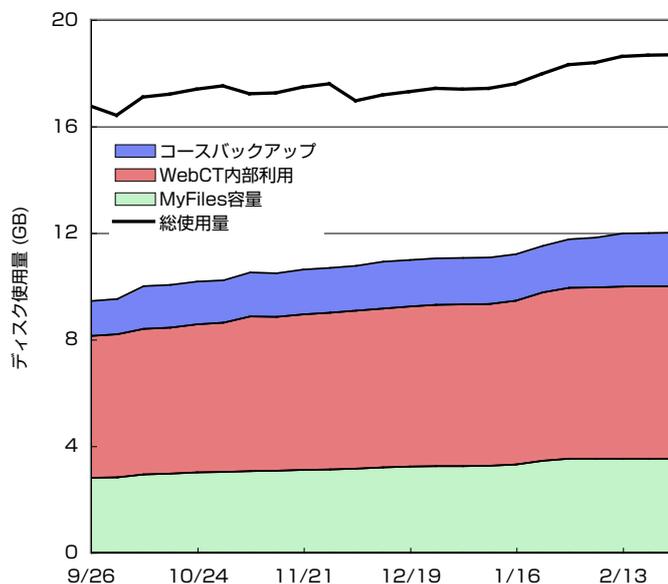
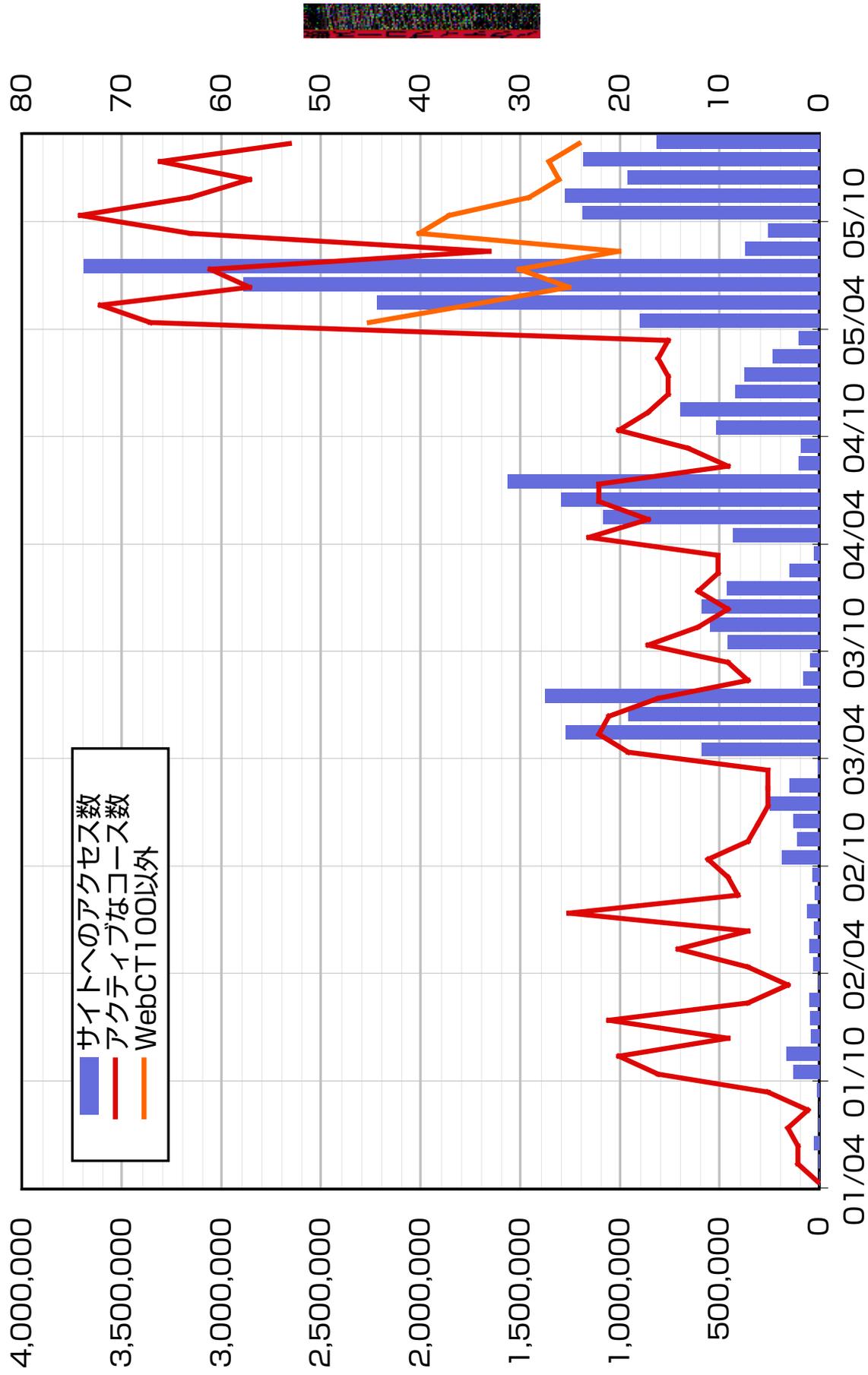


図2-9

WebCTサーバのアクセス状況推移



# 3

## 学生アンケート

前期と後期のおわりに、試行科目受講生を対象にオンラインアンケートをおこなった。調査期間は前期が2005年7月13日～8月4日、後期が2006年1月26日～2月15日。WebCT上にアンケート用のコースを作成し、対象学生をコースへ登録。担当教員を通して学生に周知させるとともに、ダイレクトメールでも回答を依頼した。

### 回答状況

前期

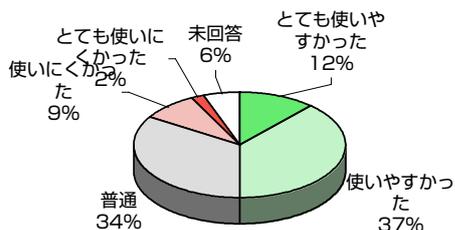
	配布	回答	回答率
一年生	863	249	28.9%
二年生	649	84	12.9%
三年生	485	71	14.6%
四年生	181	24	13.3%
修士一年生	126	11	8.7%
その他	111	7	6.3%
合計	2415	446	18.5%

後期

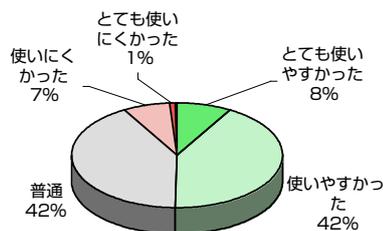
	配布	回答	回答率
一年生	694	112	16.1%
二年生	574	96	16.7%
三年生	322	41	12.7%
四年生	79	5	6.3%
修士一年生	29	0	0.0%
その他	97	11	11.3%
合計	1795	265	14.8%

### アンケート結果

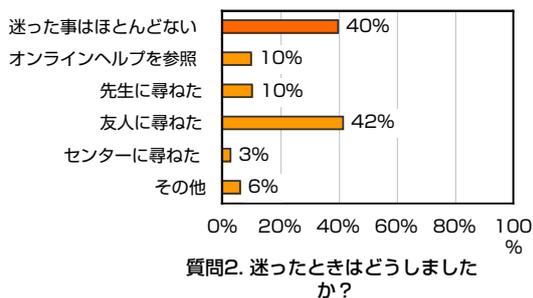
以下すべて、左側が前期の結果、右側が後期の結果である。



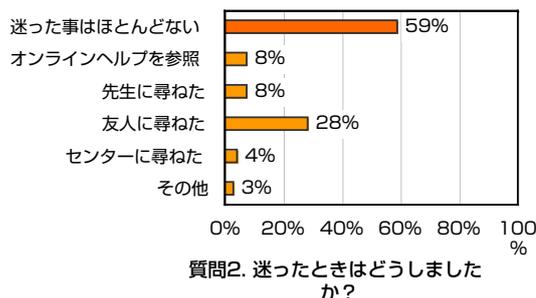
質問1. WebCTは使いやすかったですか？ (択一)



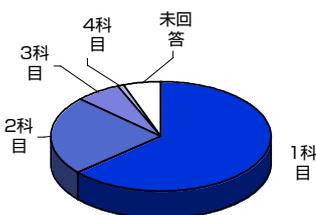
質問1. WebCTは使いやすかったですか？ (択一)



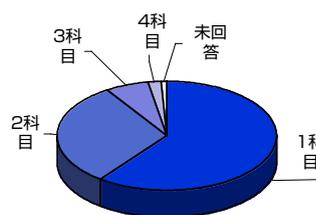
質問2. 迷ったときはどうしましたか？



質問2. 迷ったときはどうしましたか？

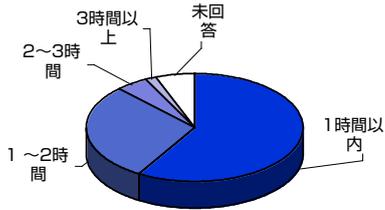


質問4. WebCTを使う授業は週に何科目？ (択一)



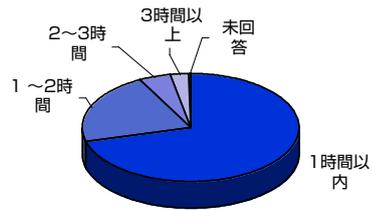
質問4. WebCTを使う授業は週に何科目？ (択一)

前期

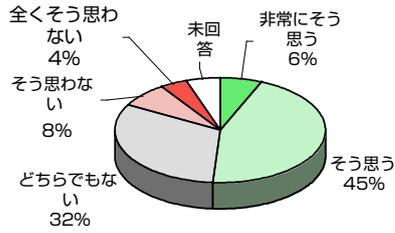


質問5. 週何時間くらいWebCTに費やしましたか？

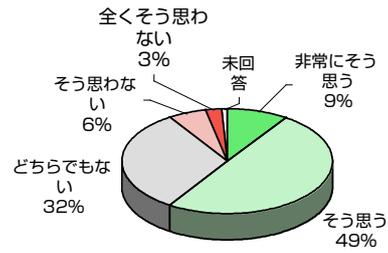
後期



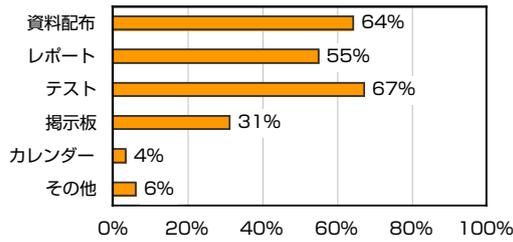
質問5. 週何時間くらいWebCTに費やしましたか？



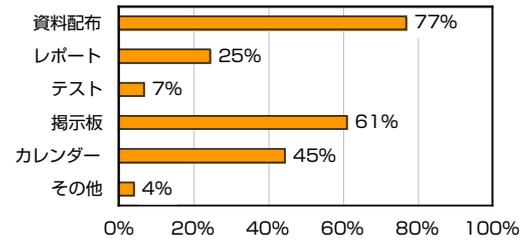
質問6. WebCTがあることで学習がはかどったと思いますか？(択一)



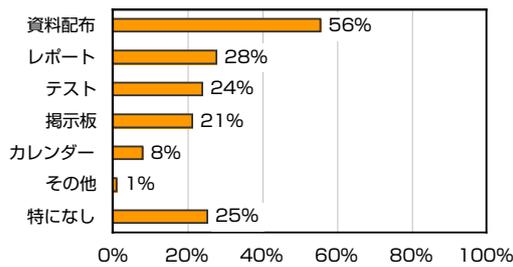
質問6. WebCTがあることで学習がはかどったと思いますか？(択一)



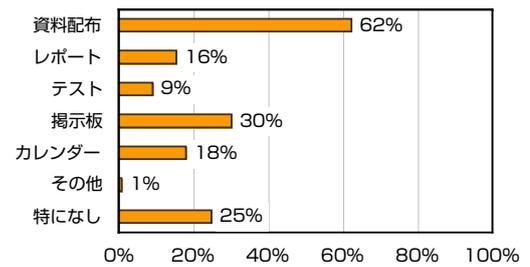
質問7. 使った機能は？(複数回答可)



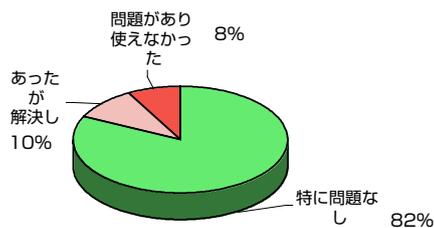
質問7. 使った機能は？(複数回答可)



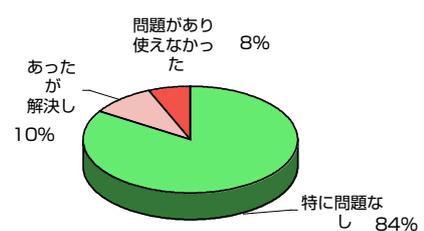
質問8. 他の授業でも使ってほしい機能は？



質問8. 他の授業でも使ってほしい機能は？



質問12. 自宅での利用に問題ありましたか？



質問12. 自宅での利用に問題ありましたか？

WebCTを使って良かった点と悪かった点を自由記述  
であげてもらった所、以下のような意見が目立った。

#### 良かった点

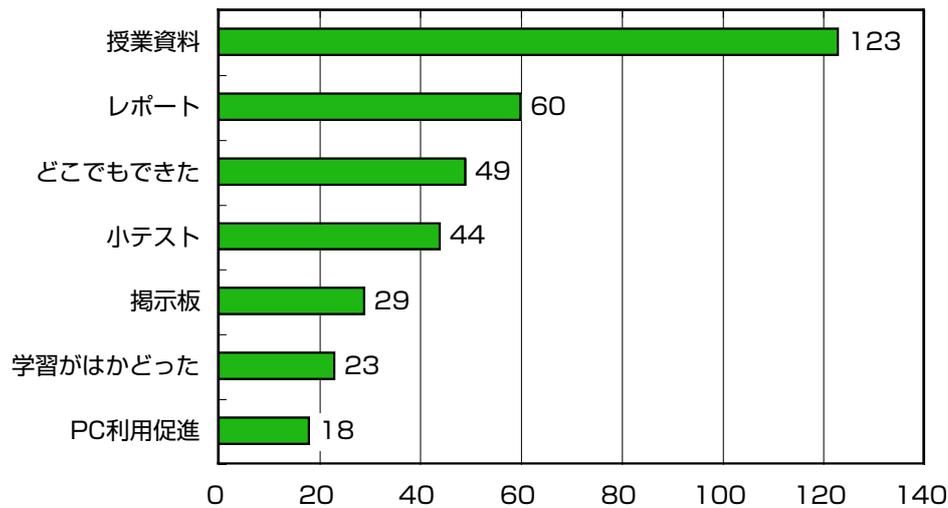
- **授業資料**：資料が确实入手できる、なくしても大丈夫、無駄なプリント配布がなくてよい、など
- **レポート**：いつでも、何度でも出せる、書くのが楽、締切がはっきりして良い、など
- **どこでもできた**：自宅でも資料がとれる、レポートが出せる、時間があるときにできる、自分のペースでできる、など
- **小テスト**：点数がすぐにわかる、復習になる、など
- **掲示板**：先生とコミュニケーションがとれた、理解が深まった、など
- **学習がはかどった**：予復習がしやすい、小テストや掲示資料を組み合わせると理解が深まった、など

- **PC 利用促進**：PC に慣れた、触る機会が増えた、など

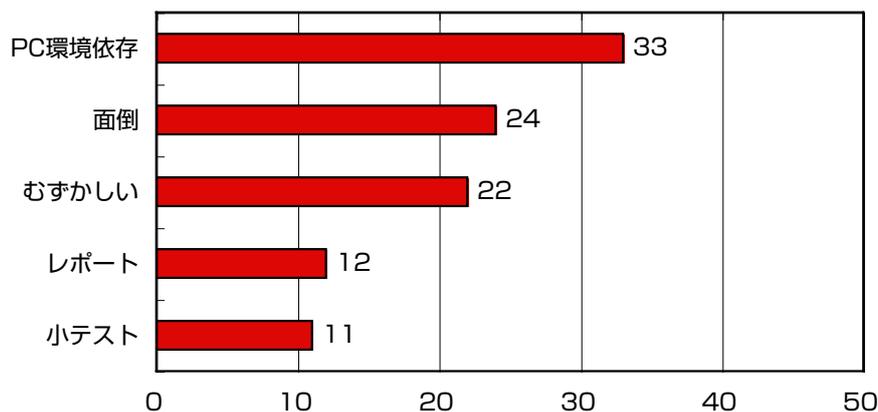
#### 悪かった点

- **PC 環境依存**：自宅に PC やネットワークがないと不利、センター端末室の時間制限がきびしい、など
- **面倒**：ログインして確認が面倒、目に悪そうで嫌だ、資料を自分印刷するのが面倒、など
- **むずかしい**：使い方がややこしい、入り口がわかりにくい、など
- **レポート**：届いているか不安、PC に打ち込むのは二度手間、締切が厳しすぎ、など
- **小テスト**：「回答の保存」が面倒、ポップアップブロックできなかった、など

良かったと感じる点



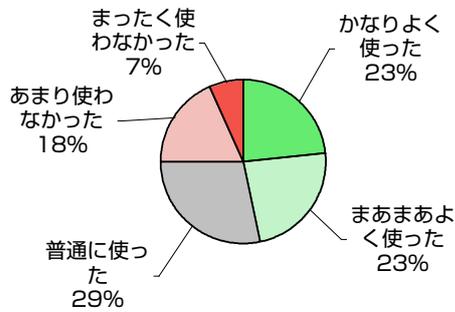
悪かったと感じる点



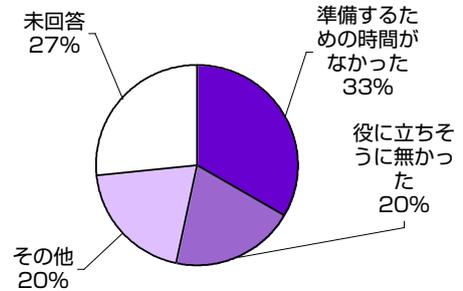
# 4

## 授業アンケート

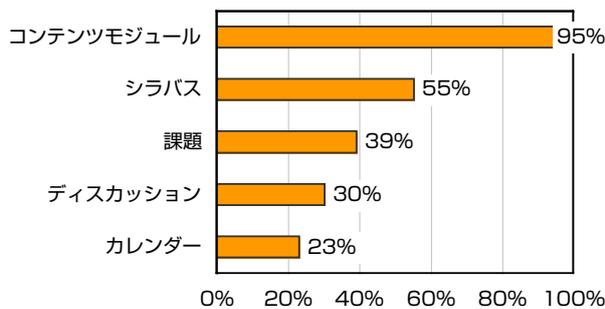
試行に参加した103科目（前後期あわせて）を対象にアンケート調査を行った。前期29科目、後期31科目、計60科目分の回答があった。



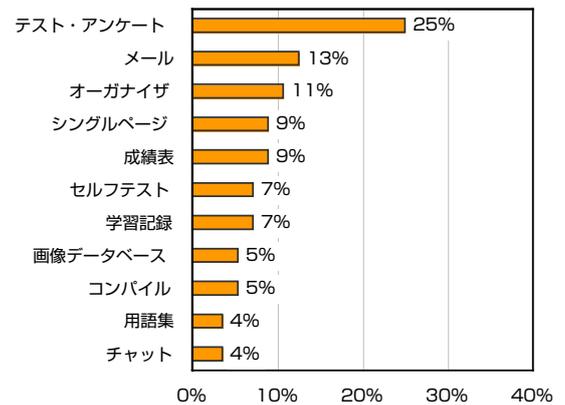
質問5: WebCTをどの程度利用したか (N=60)



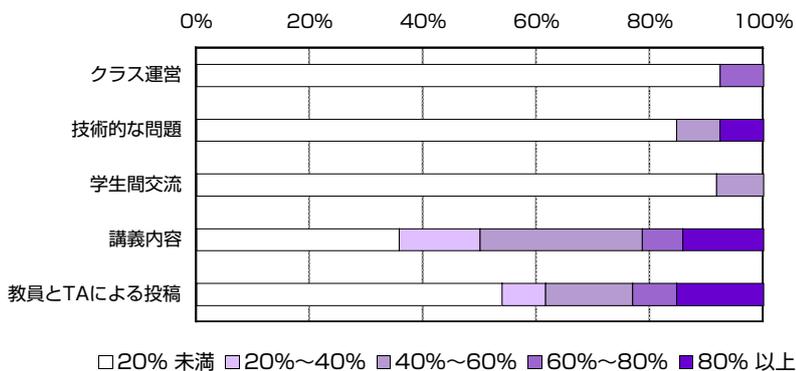
質問6: 使わなかった理由 (N=15)



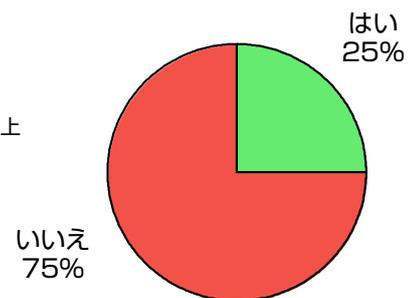
質問7: どのツールを利用したか (複数回答可, N=56)



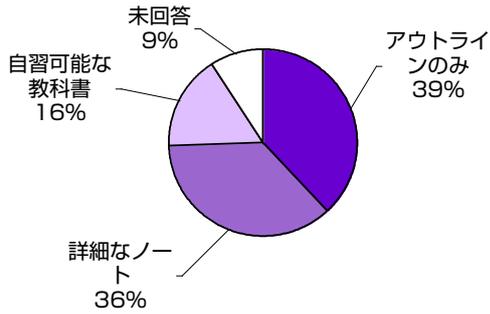
質問8: テンプレート以外で使ったツール (複数回答可, N=56)



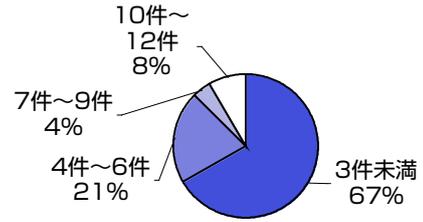
質問9~13: 掲示板に投稿された内容



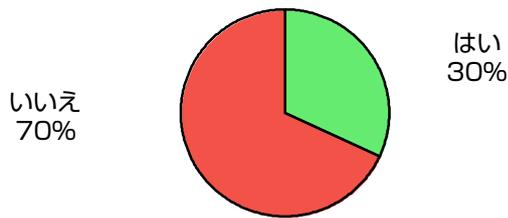
質問15: 匿名投稿を許可したか (N=16)



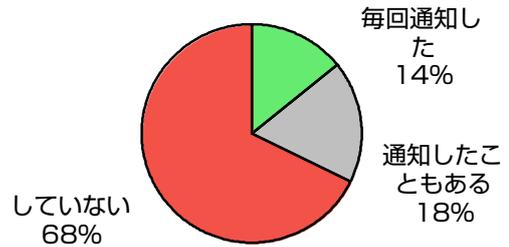
質問18. 掲載した講義資料はどの程度詳細？



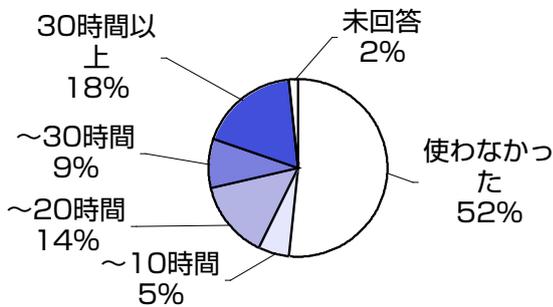
質問23. 何回のレポートを課されましたか？ (択一)



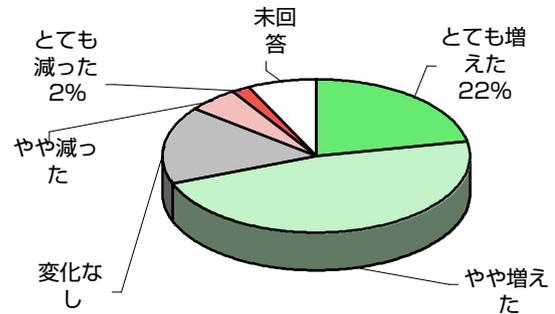
質問24. (WebCTを使った回の)レポート提出はWebCTでの提出のみを認めましたか？ (択一)



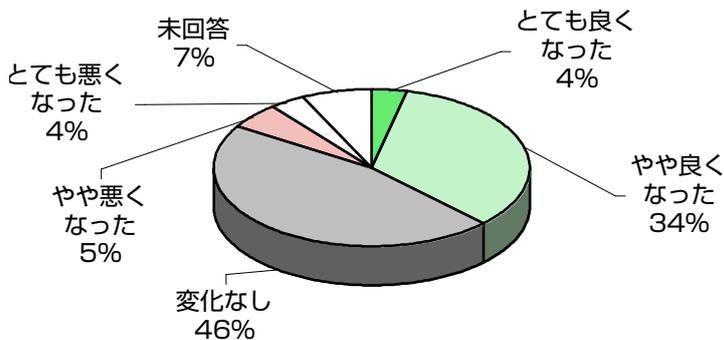
質問25. WebCTを通して学生にレポート評価を通知しましたか？ (択一)



質問26. TAを何時間使われましたか？



質問28. WebCTを導入することで、以前とくらべて授業運用の手間は変わりましたか。 (択一)



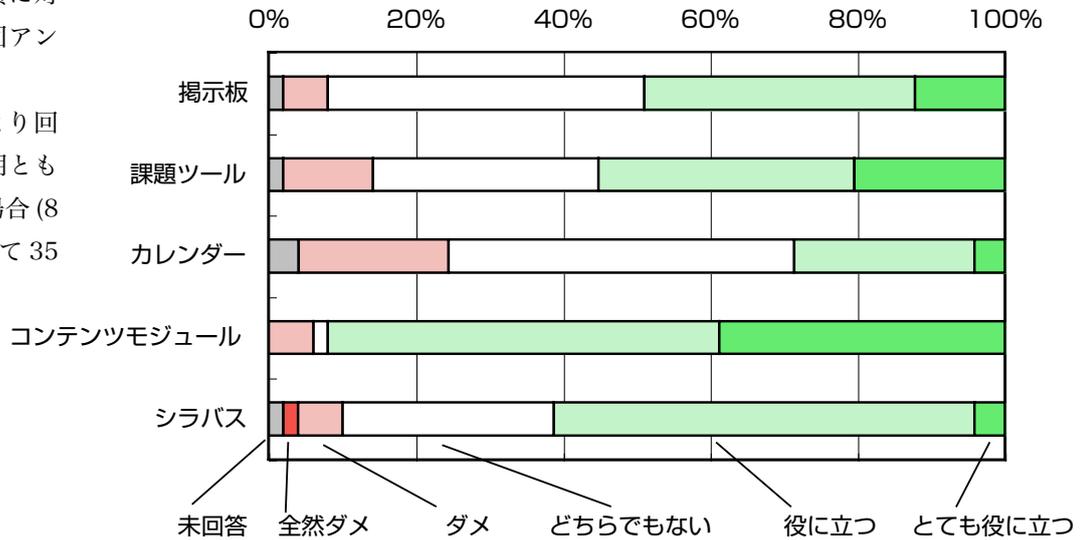
質問29. WebCTを導入することで、以前とくらべて授業の変化(教育効果、学生の学習態度など)はあったでしょうか。

# 5

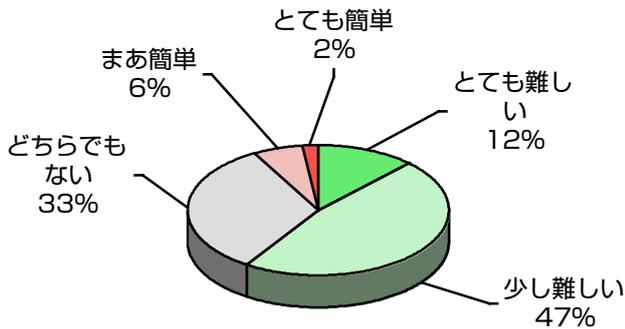
## 教員アンケート

前期 39 名、後期 43 名（重複を含め）の試行科目担当教員に対して、前期末、後期末の 2 回アンケートを実施した。

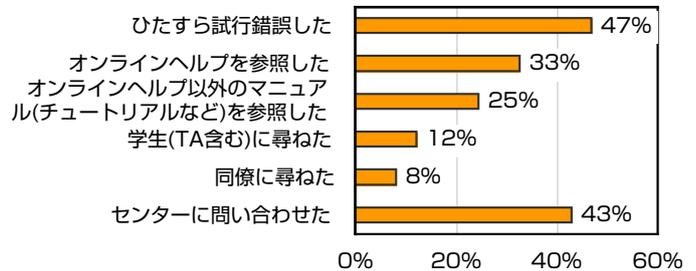
前期 22 名、後期 21 名より回答があった。今回は、前後期ともに回答をお寄せいただいた場合（8 名）には前期のものを使用して 35 件を対象に集計を行なった。



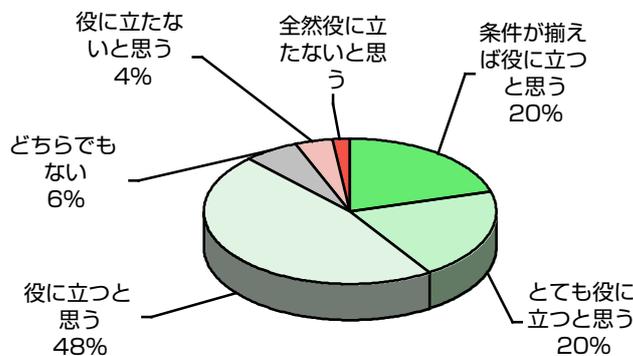
質問3～7: 各ツールの感触 (役に立たない～役に立つ)



質問9: 全体的にWebCTの使い方は難しかったですか? (択一)



質問10: WebCTの使いかたに迷ったときに、どのように解決されましたか? (複数回答)



質問13: WebCTのような形で授業を支援するシステムは、今後あなたが授業をしていく上で役に立つと思いますか? (択一)

## 自由記述設問に対する回答

### 質問 8: WebCT のようなシステムのメリットとデメリットについて、現在感じられていることがあればお書きください。

メリット：小テストの集計が容易であり、かつ回答者にもすぐ答えを確認してもらうことができる  
デメリット：操作を理解するまでに労力を要する

学生の自主学習を支援するツールとして大きな可能性を感じました。残念な事に、こちらがシステムを習熟していないため、今期は、資料の配布、クイズ、課題の提出で終わってしまいました。

もっぱら講義ノートをアップするために使っていました。受講者を特定していろいろな資料を見せられるので、大変便利に感じます。ただ、パワーポイントファイルをワードに落として、それをhtml化して出していたので、こちらの見せたいような形で学生に見せることに苦労していました。

長所：配布用の紙が節約できる。開示資料の分量が拡大した。アクセス頻度で学生のやる気を評価できる。  
短所：パソコンの有無や自宅のアクセス環境によって不公平が生じる（メディアセンターが24時間営業であれば、いちおう解消されませうけれども）。

講義資料（講義概要、過去の試験問題、有用なサイトのリンク）などは、8～9年前から研究室のweb-site上に掲載していたので、必ずしもWeb-CTでなければならないというものではないと思います。最も大きなメリットと感じたのは以下の点です。

(1) 従来廊下に張り出していた中間試験および期末試験の成績が、学生が個別に閲覧できるようになった。個人情報保護の観点から、従来は不安でした。

(2) 学生のアクセス状況が把握できるので、学生の講義に対する意欲をある程度評価できる。

利用する学生が限られていた。レポート提出も手書き提出が95～99%でした。

[メリット]

WebCTなどのCMSを用いたハイブリッド(ブレンディッド)授業は、それが\*\*適切に\*\*利用されるならば、従来の対面式授業に対し(コ

ミュニケーションを重視し、それを積極的に活用するといった)協調的学習環境を導入させることで学習効果をあげるものであることは、すでに多くの教育工学研究の知見によって明らかにされています。

WebCTとそのほかのツール群やシステム(たとえばWikiなど)を組み合わせることにより、学生の創造性を刺激するような授業環境を、これまでとは比較にならないほど容易にかつ効果的に構築することができます。同様のことはたとえば、MITでも物理学の300名以上の大規模授業(演習)やいわゆる文系の授業(歴史学や哲学など)において行われており、e-Learningはもはや授業形態を問わず、教育分野を問わず、(日本以外では)高等教育を支える学習基盤となってきました。

さらにまた、WebCTサーバに記録されている学習履歴情報を効果的に活用することにより(教育工学で得られた実践的知見に基づき)ダイナミックな授業を展開することができます。

といったように、WebCTを利用するならば、従来の授業形態ではおよそ不可能であったような高等教育をダイナミックかつ効果的に展開することが可能となります。

[デメリット]

教育工学的知見に基づくサポート体制が確立していない現状では、e-Learningの展開は、結局は個々の教員のボランティア精神と「ガンバリ」あるいは「好奇心」に依存する他なく、その場合e-Learningが非常に高い確率で失敗してしまうものであることは、すでに多くの内外研究・教育機関の経験と研究によって明らかにされています。e-Learning高等教育を成功させるためには多くの組織的・財政的・教育工学的バックアップ体制が必要不可欠なのです(インストラクショナル・デザインに基づく授業環境の設計など、果たして通常の教員ができるでしょうか?)。であるのに、なぜ広島大学ではたかだかTA経費の補充程度のサポート(とメディアセンターの先生方のガンバリ)のみでe-Learningを全学的に展開させようとするのか、まったく理解に苦しみます。教育工学の成果と内外研究機関の経験をまったく無視しています。

コンテンツの充実に時間が必要と感じました。例えば、Flashなどを使って視覚的に概念を理

解させたいのですが、今期はできませんでした。レポートや課題については、利用が困難でした。課題の提示には、有効でした。

課題提出のweb提出は便利だが、ダウンロードしないとみれない。JABEEのエビデンスとしてプリントアウトしなければならない。いろいろなコマンドがあり、申し分ないが、かえって扱いにくい。

授業の資料を掲示できるという点では非常に有益であったと思います。学生のレポート提出で、うまくuploadできない学生がいたので、取り扱いの方法を熟知させることが必要だと感じました。私がWebCTの活用方法がよくわかっていない点があったので、学生にも分かりやすく説明できなかったと思います。この点は反省材料です。

メリット：授業時間以外でも教材や情報を提供でき、予習、復習、調査などの自主的な学習に導きやすい。宿題やテストをゲーム感覚で提供できる。双方向の授業のきっかけをつくることのできる。教員側も授業内容や提示方法の工夫を通じて、授業の改善に取り組むきっかけになる。

デメリット：準備に相当な時間が必要。学生側にこちらの意図を理解してもらえないときは、意味をなさない。パソコンの苦手な学生には取り組みにくいのでは。

メリット

学生が授業の予習、復習をするのに役立つ意欲のある学生が学習を深めるのに役立つ

デメリット

コンピュータリテラシーの問題、学生側も教員側も。

いずれは解決するにしても、今のペースでは遅すぎる

配付資料を印刷しないで学生に届けられる。小テストを管理しやすくなった。

個人でもHPを作成し、講義情報を掲載してきた。WebCTでは学生(ダミー)アカウントがあったおかげで学生からどのように見えるかを確認できたが、情報を公開しても属性を公開しないと学生から見えないなど、WebCT独自のルールになれる前に終わってしまった。また、慣れる必要も魅力も感じなかった。申し訳ありませんが率直な意見です。

設定項目が多すぎて、テストの設定などよく忘れてしまう項目がある。

講義資料の配布だけでも WebCT を使おうと思ったが、資料作製等に時間がかかり、WebCT を有効に利用できなかった。数学の演習などでは、問題を解かせて、それを添削するという過程ははずせない。WebCT を用いて基本事項の確認ぐらいでできればと思ったが、そこまで手を出す余裕はなかった。個人で利用するには、少しづつの経験を積みかさねなければならないが、経験が積みかさねられなかった。

課外の課題を WebCT でやらせようとする、WebCT が利用できない学生に対して不公平となる。クラブ等で大学では時間がとれず、帰ってからは利用環境がない学生を作るわけにもいかない。すると短時間で処理できることしかやらせられない気もする。

一度ある程度作成してしまえば、次年度は、それを修正して、改良していけばよいと思う。しかし、とにかく、最初の年は、準備に時間がかかりすぎる。

メリットがデメリットを上回るには、現場への応用力と禁欲を要します。

学生宛の E-mail が「もみじ」のものと連動していれば良いと感じました。WebCT の E-mail は学生がアクセスしない限り見ることができないので、

学生の PC 習得レベルに差があり、使えない割合がかなりいる。教養の段階（情報基礎など）で WebCT に対応する内容を希望したい。

メリット：学生との連絡が取りやすい。  
デメリット：システムを上手く活用するようになるためには、準備など膨大な時間がかかる。

自宅にネットワーク環境を有するか否かは学生による。WebCT を全面的に使用されることは、ネットワーク環境を持たない学生にとって不利益になる可能性がある。

大学院の講義（社会人を含め 10 名以下のことが多い）なので、コンテンツの置き場所として WEBCT は利用されると思います。ディスカッションなどは講義中あるいは電子メールで十分と考えています。講義の Q&A などは講義資料（コンテンツ）として徐々に蓄積していく予定です（偶数年開講なので今年の後期からスタートです）。

学生が予習、復習を行うときには非常に役に立つ。自宅でも利用できるのがよい。ただ、講義資料をすべてシステムに公開すると、講義への出席意欲がなくなるようである。

私は授業の資料をできるだけ掲載するようにしていました。ただ、WebCT で授業内容を充実させると、授業を受けなくても、これを見るだけで授業の内容が理解されるのではないかと感じました。

メリット：  
(1) 情報提供の容易さと完全性（紙では休んだ学生が問題）  
(2) テストの自動採点（多人数でも毎回実施可能）  
(3) 学生との情報共有（採点結果などが教員と学生で相互に確認可能）  
デメリット：

(1) 情報提供が完全すぎて、作業が自宅でもできて、欠席の遠因になる  
(2) 自動採点に拘ると比較的簡単なテスト内容になってしまう  
(3) レポートの採点や、掲示板などに即時性がありすぎて、学生の期待に答えようとする、教員の（心理的）負担が大きい  
システムの問題

(1) ファイル名などの漢字対応が完全でない（学生レポート提出に障害）  
(2) テストで複数回受験できるようにした場合で、最高点を評価するようにしたときに、結果を参照すると最初の回答が表示されている  
(3) 学生レコードの一覧表形式の表示で、ソートが自由自在にならない。どうも氏名のアルファベット順が基本のようで、ID 順を基本にすると入力に困ることがある。特に、レポートの採点入力はアルファベット順のみで、ID 順他にできないように思う。  
(4) システムの操作に不統一感がある。たとえば、チェックとクリックなど。また、「質問 DB」が開ける場所が非常に限られている（と思う？）さらに、学生レコードのダウンロードが 1 つにクリックを入れるとその値だけであるが、すべてにクリックを入れると ZIP 形式でフォルダに入れた形式になるなど、分かっていないと使えない。  
(5) データの操作に関しては、学生の各レコード（DB）を基本にした操作がない（少ない）ので、これを充実させて、自由に値を操作したい。  
以上。

教材の蓄積ができるメリットがある。システム開発においては、教科の個性が必要と思う。

歯学部講義室から 60 名同時の WebCT 接続できないことと、コンピュータ設置がないので、情報処理室でないと利用できない。講義時に WebCT に接続させて講義したので、20 名講義と 5 名講義でしたが、来年度からは 60 名で講義時に情報処理センターから接続させる予定

ですが、教員用の画面は、持参した PC プロジェクターでスクリーンに映写しなくてはなりません。

テスト時に、他のページを開けることを簡単に阻止できるシステムを構築してほしい。授業資料を PDF で掲載しているので、システム内で PDF をデザイナーは変更できるシステムを希望します。

学生に WebCT の使い方を情報教育として教えてほしい（教えていらっしやるのかもしれないが？）。学生が課題提出に慣れていないことと、コンピュータ使用に慣れていないこと、霞の情報処理センタのコンピュータ台数が少ないことがあります。

手を動かして講義の話をまとめることができる学生が少なくなることを危惧しています。

メリット：利用目的が資料提示であった。この点で、学生が自主的にダウンロードするので必要部数を判断して準備する必要がなくなりよかつた。

デメリット：資料を pdf で準備すること。html で書けばよいのかもしれないが、たぶんこの授業内容の表現には html の書式は不十分。

授業資料をアップしても、パワーポイントで作成した資料であれば、それを利用するアプリが必要になってくる。遠隔授業等では利用価値があると思うが、今の状態では使いにくい。また、レポート提出や試験等の作成に関して、もう少し簡単に作成ができないと、WebCT の設定のために使う時間がかかりかかってしまい、利用者は増えないと思う。

掲示板に関しては、もみじの BBS よりも使い勝手が非常に良いので、学生からも好評を得ている。私自身の使用感はとても良い。

補助的な使いかたしかしていないので、メリット・デメリットについて述べるほどの知見がないので、単なる感想を述べます。

けっこう敷居が高い。準備が大変。資料等の掲示だけでも、学生登録はしなければいけないなど余計な作業がある。各学生一人一人に対応できるしくみ（その学生だけ見れるしくみ）が標準で用意してくれると便利。

学生が必要な時に講義資料を入手できることがメリットだが、これは、自分で HP を立ち上げてもよい。学生がコンピュータ端末まで行かなくては使えないのがデメリットであり、無線 LAN の整備と学生がノートパソコンを必ず所有するシステムとすることが望ましい。

メリット：予習、復習に用いることができる。  
デメリット：WebCT 自体がまだ使いにくいために時間がかかってしまい、自ら HTML コン

テンツを用意した方が早い。

.....  
毎年同じ内容で授業をするならば便利だと思う。

.....  
学生の WebCT へのアクセスパターンを追跡できるので、個々の学生の特性を通常の授業とはちがった面からみることができると期待しています。

また、WebCT を効果的に使用するために少し時間をかけて授業をデザインし直す必要性を感じています。

残念ながらまだほとんど使っていない状態なので、メリットデメリットはよくわかりません。

.....  
理学部化学科で教える授業の内容では、WebCT のメリットとされている点は、メリットにはなりえない、と思います。しかし、学生に授業の全体像を常に意識させ、授業で説明しきれない補足説明を与えることができる、という点

は、よかったと思います。

.....  
いちいちプリントしなくても資料を提示できるのは教員サイドの「省力化」に寄与したが、「効果」についての検証ができていない。資料については「後で見えておいて下さい」と授業中に言っていたが、講義の際に WebCT の画面を見せながら、授業が展開できればいいと思うことがあった。やればできるのであろうか？

.....  
十分に活用できれば学生の学習効果は上がると思います。ただ、学生もレポート提出の仕方などが理解できていない学生がいました。学生へのガイダンスもさらに必要かと思えます。

.....  
WebCT を使って効果をあげようと思うと、こまめに管理をする必要がある。いくつかの科目を同時並行で使っていると、かなりの時間を割かれる。

メリット：学生の自学時間を提供でき、学習効果を高めることができる。

デメリット：授業準備・学生対応に時間とお金が予想以上に必要である。

.....  
デメリット：1) 学生が PC を常時使えない環境である。1) ケーブル端末かあるいは無線 LAN 対応がのぞまれる。2) 授業時間数が多いため、学生が PC を使う時間がない。レポートや小テストには良いが、ポータルフォリオのような手書きが推奨されるものは不向きである。メリット：ディスタンスラーニングの状況で、個々へのフィードバックが可能であるため、学生個々の能力に合わせたティーチングとコーチングができるのではないかと。

.....  
長期的には講義準備の時間節約になると思う。インターネットで簡単に資料が取れるので、あまり著作権を気にしないで安易に使ってしまう。その意味で著作権の扱いが心配。

## 質問 15: 今後大学全体で WebCT のような支援システムを整備・普及していくにあたり、何かコメントがありましたらお聞かせ下さい。

今回 TA の予算を付けていただけたことは本当にありがたいことでした。どうもありがとうございます。私の場合、WebCT へのアプローチはほとんど TA にお願いしました。

.....  
教員の能力改善 (FD) にも使えるので、ベストプラクティス集のようなものがあればいいと思います。

.....  
早晩、全授業で採用せざるを得ないであろう。その結果、授業内容が公開され、評価も厳しくなるだろう。大学間の差異も解消されて、受験戦争もなくなるかもしれない。よいことづくめである。よって、発展段階の今こそ、WebCT を試行錯誤している授業に対するティーチングアシスタントなどのサポートをもっともっと望みたい。

.....  
1) 授業資料作りの充実が大変で、わかりやすい図表化のサポート体制が必要です。2) 講義と WebCT の目指すところの区分けをどうするのか。問題で、予習復習のサポートにするにしても、WebCT を充実するには教科書的な内容が必要になり、そこまで作りきれません。演習などの学生に考えさせてレポート提出などを課すのであれば、大部分の時間を WebCT で済ますことができるのかなと思います。

e-Learning 高等教育は従来の教育に対するパラダイムを革新的に変える可能性を持っていますが、これを成功に導くためには必要不可欠となる諸条件 (インストラクショナル・デザイナーなどスペシャリストによる支援、財政的支援、授業設計にあたっての出版モデルの導入、リエゾン制度の導入など) が存在することは、これまでに教育学や教育学的研究分野において明らかにされています。にも関わらず、優れた高等教育研究センターと教育学研究科を抱く広島大学において、それらの研究成果と知見を無視し「いきなりプロジェクト」を実施しているような現状は、メディアセンターの先生方のご負担とご苦労を鑑み、理解に苦しみます。

一方東大では e-Learning に関するこれまでの失敗と成功の (教育学ならびに教育学的な) 分析に基づき、それらの成果を実際に活かした Tree プロジェクトが先日発足しました。「ひとつよろしく頼むよ」的プロジェクトや「サーバがあるからもったいないのでとりあえず使しましょう」的プロジェクト、あるいは「流行っているからうちもやってみましょうか」的プロジェクトとはまったく異なるこのプロジェクトの大きな特徴は、組織的・ネットワーク的・財政的・教育学的支援体制をまずしっかりとデザインし、その上で高等教育の質的改革を行っていく点にあります。同様の動きはすでに e-Learning を先進的に行ってきた高等教育機関でも (批判的検討を踏まえた上で) 始まっています。e-Learning を成功させるための諸条

件をクリアするためには、このようなしっかりと学内のバックアップ・プロジェクトの推進が不可欠です。であるのに、広大ではなぜそれを踏まえたような動きやトップの決定がなされていないのか、不思議に思えてなりません。e-Learning が注目され始め何のサポート体制もなしに実施され、乱立し、そして? 失敗した数多くの北米やわが国の高等教育機関の二の舞を踏んでどうするのでしょうか (その失敗があるからこそ e-Learning を成功に導くためにはどのような条件が必要であるか、それに関する研究が精力的に行われてきているのです)。

私は、WebCT を利用した高等教育のオープンな可能性を固く信じていますし、実際の授業でもそれを実践的に行ってもいます。ですが、そのためには、国内外でこれまでに蓄積されてきている多くの教育学的/教育学的知見や研究成果を踏まえた上で、効果的・効率的・革新的な学内のサポート体制の確立を切にお願いいたします。

.....  
今回のような取り組みは、よいと思う。このことから WebCT に向いている教科からコンテンツの充実をはかり、ノウハウの蓄積を行うことが必要と思う。

.....  
使い方が簡単であれば利用者は増えるのではないのでしょうか。

ハード面では、学部に対して情報機材の充実を大学全体で補助する。教員に対してもノートパソコンの貸与や教材ソフトのアドバイスなどしてほしい（自分はノートパソコンをもっていないので苦労しました）。ソフト面では、もうすこしつかいやすいといのでは。たとえばファイル形式にかかわらず何でも表示できるとか（例えば word や excel の文書をそのままとか）なら便利かも。

本学のような大規模な大学では、学生の多角化に伴い、基礎的な教育をコンピュータ化して行かざるを得ないことを全学で認識し、しかるべき対応をしていくこと。そのようなシステムを構築する仕事が「雑用」として扱われず、いわゆる「研究成果」と同等の評価が与えられること。まず無理でしょうが。

WebCT に魅力を感じなかったが、唯一価値があるとすれば端末室で実施している講義で試験を行ったりアンケート（レポート）をとったりすることであろうか？

授業の内容によっては、このようなコンピュータシステムが適さないものもある。したがって、学生にとって必ずしも有用なシステムであるとは限らない、ということは認識すべきだと思う。

使用に伴うコストと便益の両方を考えましょう。

普及させるまでには、現在のようなある程度の特典のようなものはあった方がよいと思います。

とてもありがたいシステムであると思う。啓蒙紹介活動を続けてほしい。

私個人としては、対面授業を第一にしたいと考えています。いろいろな講義形態があつてよいと思いますので、個々の教員に利用を強制するのはいかがだと思います。

コンピュータが不得意な教員でも利用できるようにすべきである

もみじとの連携を深めてほしい。

WebCT の使用目的を講義遂行時に利用することにおくのか、または講義前ないし終了後の学生の予習復習に利用するのかにより、構築する授業資料内容が異なるように感じます。現在は、授業スライド資料配布をなくするためと講義終了後の毎回の小テスト遂行と採点に利用しています。しかし、講義内容を文章でまとめ復習用

に掲載することには、スライド作成以上かなりの労力が必要で未完成です。講義で話した内容を文章化や図示するサポート体制などが必要だと思います。

講義に WebCT を利用する時には、学生が別のホームページを見ていると警告できることや、講義途中に簡単に学生とのやり取りがコンピュータを介してでき、テストの一部遂行も随時できるように、学生の画面を教員が簡単に制御でき、かつ同時に学生自身がその画面で文字入力できるシステムが望ましい。

日本語入力では、講義中に講義要約を入力することは困難で、授業資料をプリントして、それに手で書き込むことになると思います。WebCT 講義が増えれば、1ヶ月のプリント可能枚数を増加させないと対応できなくなる可能性が高くなります。

しかし、WebCT の完成度を高めると学生によるコンピュータ自習が可能になり、本当の意味での e-ラーニングになります。教員の役割は、その e-ラーニング結果の判定を踏まえて問題点解決のための講義ないし更なる e-ラーニング構築ということになるのでしょうか？ ヒトとの接触がなくても終わる、何か寒々とした e-ラーニング風景が 浮かんできます。

Q8 のデメリットでも書きましたが、教員の資料（ワープロファイル）をできるだけ簡単に webct 授業資料に載せられればよいと思う。その意味で、pdf 形式は優れていると思う。資料を pdf に変換するツール（あるいはソフト）を準備してもらえば助かる。

はりきった自習システムなどを、みなが作りはじめると、学生はすべてをこなす時間がなくなる。オンライン環境がないと講義についていけなくなるのはよくない。逆に、端末室などは 365 日 24 時間オープンする。

上記の通り、無線 LAN の整備と学生がノートパソコンを必ず所有するシステムとすることが望ましい。

今年度の様なかたちでしばらく試行するのがよいと思います。学部とかコースに数を割り当てるようなことはしないほうがよいと思います。

「授業を支援するシステム」というのは、教員を支援する、という意味でしょうか？それとも、学生を支援する、という意味でしょうか？両方ともを、いろいろな側面から支援することができて初めて、学生にとってよいシステムになるはず。1日に12時間、1週間に7日、1年間に52週、これだけの時間をすべて使っても

まだ終わらないだけの仕事量をかかえている教員は多数います。これらの教員に、ただ WebCT を使え、と言っても無理です。WebCT を有効利用するには準備に時間がかかります。その時間を、教員に与えることが、学生への教育内容を高めるために、まず必要なことだと思います。

教員と学生とも使い易いように設計していただきたい。

Q14 と一緒。学生からのテクニカルな質問、「ログインできなかった」「課題が送れなかった」等の質問に直接対応してくれるシステムを作つてほしい。

システム導入の目的が不明確だと考える。人的・資金的な手当てを十分に提供できないのであれば、個々人の責任・目的（と費用負担）に基づいて導入することが望ましい。一方、大学全体として大学設置基準にしたがって、学生による授業外の自学時間を確保することを目的とするなら、相応の支援体制が不可欠である。

掲載資料についての著作権、著作権（肖像権も含め）などへの対処についての支援が欲しい。

# 6

## WebCT100 プロジェクト報告会

2006年3月6日、このプロジェクトの締めくくりとして、「コース管理システムによる新しい高等教育の実践」と題した報告会、研究会を開催した。教職員研修を兼ね、約60名の参加があった。

### 日時

2006年3月6日(月) 14:00～17:30

### 場所

広島大学 学士会館 レセプションホール

### プログラム

14:00～15:00 「熊本大学におけるeラーニング等の取り組み」

中野裕司(熊本大学 総合情報基盤センター)

15:00～15:30 「e-learningの枠組と学習効果の測定事例」

北垣郁雄(広島大学 高等教育研究開発センター)

15:30～16:00 「広島大学17年度WebCT100プロジェクト」

永井克彦(広島大学 教育室 遠隔教育委員会)

16:00～17:30 事例発表

- 「WebCTを1年間使用して」  
柴芳樹(医歯薬学総合研究科)
- 「異文化理解とWebCTの利用：文化人類学Bでの実践」  
佐野真理子(総合科学部)
- 「WebCTを使ってみて」  
安野正明(総合科学部)
- 「自然科学系基礎教育におけるWebCTの利用(事例報告 基礎化学実験)」  
平野哲男(総合科学部)
- 「WebCTの醍醐味は、『テスト→学生管理→成績表』にあり！」  
越智泰樹(社会科学部)
- 「オンライン情報セキュリティ講座」  
中村純(情報メディア教育研究センター)
- 「教養教育と専門教育でのWebCT利用」  
浦光博(総合科学部)



WebCT100  
Hiroshima University

広島大学教職員研修  
WebCT100プロジェクト報告会

### コース管理システムによる新しい高等教育の実践

平成18年3月6日(月) 14:00～17:30  
広島大学学士会館レセプションホール

14:00～15:00 「熊本大学におけるeラーニング等の取り組み」  
中野裕司(熊本大学 総合情報基盤センター)  
15:00～15:30 「e-learningの枠組と学習効果の測定事例」  
北垣郁雄(広島大学 高等教育研究開発センター)  
15:30～16:00 「広島大学17年度WebCT100プロジェクト」  
永井克彦(広島大学 教育室 遠隔教育委員会)  
16:00～17:30 事例発表  
柴芳樹(医歯薬学総合研究科) 佐野真理子(総合科学部)  
安野正明(総合科学部) 平野哲男(総合科学部)  
越智泰樹(社会科学部) 中村純(情報メディア教育研究センター)



広島大学教育室では、教育の質の向上の一環として、CMS (Course Management System) コース管理システム) の導入を検討してまいりましたが、平成17年度には、WebCT100プロジェクトをきっかけに、広島大学全体で100以上の授業科目でWebCT100が導入されました。この度、WebCT100プロジェクトの報告会を開催するにあたり、WebCT100を利用したeラーニングの先進的な例として、熊本大学のケースを紹介していただくともに、本学における利用状況の体制面をもとに情報交換し、CMSの導入促進に向けた見直しについて議論したいと思います。

参加申込は下記URLで受け付けています。  
<http://www.r11se.hiroshima-u.ac.jp/webct100/>  
問い合わせ：広島大学教育室の研修開発係 C (内線 5796)  
kyoku@semonoffice.hiroshima-u.ac.jp

広島大学

**平成 17 年度 WebCT100 プロジェクト報告書**

(2006-12-27 修正版)

平成 18 年 8 月発行

発行：広島大学教育室 遠隔教育委員会

編集：WebCT100 プロジェクト実行委員会

永井克彦 (遠隔教育委員会委員長・総合科学研究科)

宮尾淳一 (工学研究科)

中村 純 (情報メディア教育研究センター)

隅谷孝洋 (情報メディア教育研究センター)

中山広明 (教育室)

